

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

(1) 委員会名簿

氏名	所 属	専門分野	備考
宜保 榮治郎	国立劇場おきなわ	民俗・芸能	委員長
中村 誠司	名桜大学教授	地域史・地理	副委員長
安里 進	沖縄県立芸術大学教授	考古・歴史	
田名 真之	沖縄国際大学教授	歴史	
千木良 芳範	沖縄県立博物館・美術館副館長	生物	
仲原 弘哲	今帰仁村歴史文化センター館長	歴史	
末吉 司	NPO法人HICO代表	社会教育	
前田 裕子	前田産業ホテルズ代表	観光	
喜納 すえ子	名護市立源河小学校校長	教育	
宮城 一夫	名護博物館友の会会長	美術	

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

(2) 各委員会と検討内容

※いずれも敬称略

●平成22年度第1回検討委員会

平成23年2月17日(水) 名護中央公民館

<検討委員>宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、末吉司、前田裕子

<検討内容>

- (1)委任状交付 (2) 委員長・副委員長選出 (3) 新博物館の資料収集・保存について
(4) 新博物館の調査・研究活動方針

●平成22年度第2回検討委員会

平成23年3月23日(火) 名護博物館ギャラリー

<検討委員>宜保榮治郎、中村誠司、安里進、宮城一夫、前田裕子、末吉司

<検討内容>

- (1)九州先進地視察研修の概要説明 (2)新館の資料収集と調査研究の方針

●平成23年度第1回検討委員会

平成23年8月2日(火) 名護博物館ギャラリー

<検討委員>宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、末吉司、前田裕子、宮城一夫、千木良芳範

<検討内容>

- (1) 前回までの確認と今後の流れ (2) 建設候補地調査 (3) 建設候補地について

●平成23年度第2回検討委員会

平成23年10月18日(火) 名護博物館ギャラリー

<検討委員>宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、末吉司、前田裕子、宮城一夫、千木良芳範、喜納すえ子

<検討内容>

- (1)用地取得の進捗状況 (2)基本計画策定について

●平成23年度第3回検討委員会

平成24年2月28日(火) 名護博物館ギャラリー

<検討委員>宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、末吉司、前田裕子、宮城一夫、千木良芳範、喜納すえ子

<検討内容>

- (1) 用地取得の現状状況 (2)基本計画の策定について

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

(3) 検討委員会議事録(要旨)

① 平成22年度第1回検討委員会

平成23年2月17日(水) 16:30~18:30 /名護中央公民館
出席委員: 宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、末吉司、前田裕子
事務局: 名護市教育委員会(比嘉恵一、中本正泰)、名護博物館

- 委任状交付、委員紹介、委員長・副委員長選出
- 事務局による現状報告
 - ・現在の名護博物館敷地は合計して約1,700㎡。
 - ・新館の建設用地は、まだ決定されていない。
 - ・職員は館長(文化課課長兼任)以下係長1名(民俗)、主査1名、学芸員2名(自然史)、その他嘱託が1名(歴史・民俗・美術)、臨時職員が2名の合計7名。
 - ・収蔵資料はほとんど台帳化されている。
 - ・収蔵庫は満杯であり、空調設備が設置されていないため保存環境は厳しい。
- 審議

<調査・研究活動方針>

新館の建設用地がまだ未定であり、具体的な施設建築計画や展示配置計画が立てにくいため、活動内容に絞って議論がなされた。

しかし、基本計画策定の基礎となる基本構想の共有が十分とはいえなかったため、基本構想を踏まえた活動計画とそれを実現するための具体的な事務局案を、検討委員会で審議するということが確認された。



5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

② 平成22年度第2回検討委員会

平成23年3月23日（火）／名護博物館ギャラリー

出席委員：宜保榮治郎、中村誠司、安里進、宮城一夫、末吉司、前田裕子

○ 九州先進地視察研修報告

平成22年3月9日（火）～3月12日（金）におこなった出島史料館・長崎歴史文化博物館（長崎）、いのちのたび博物館・九州国立博物館（福岡）、萩博物館（山口）の視察研修について、安里委員、前田委員が報告。

○ 審議

<活動計画案の順番>

今年度の基本計画をどのようにまとめるかについて、最終的な冊子案の形を示しながら事務局が説明。事務局では、博物館活動を調査研究、資料収集・保存、教育普及、地域連携、展示という観点で分類し、基本テーマである「名護・やんばるのくらしと自然」にしたがって、具体化できる可能性のあるメニュー案を提出し、特に調査研究と資料収集および保存について審議いただいた。

委員からは、活動内容が細切れで多すぎるということから、名護博物館が基本テーマにそって何をやりたいのかを、主体的に選択することが重要であり、開館までの時間のなかでそれをいかに進めるかを基本計画にするべきという意見や、活動計画案が多すぎて現実的ではないという意見が出された。

そして、博物館の調査研究や資料収集は展示に反映するためのものであり、基本テーマである「名護・やんばるのくらしと自然」をいかに具体化するかが優先されなければならない、細かすぎる活動計画案を先に審議するのは順番が逆であるとの指摘があった。展示計画の大きな枠組みをつくるのが先であり、展示と連携する教育普及も同時に検討しなければならない。調査研究や資料収集は、そこから派生する活動ではないかということであった。

<展示の考え方>

自然や考古、民俗といった分野ごとに分けた展示ではなく、「やんばるの人々のくらし」をベースに自然や民俗、考古資料といったものがつながってくるイメージではないかという意見が出された。その展示を実現するためにふさわしい調査や収集をおこない、教育普及を考えるということであった。

基本構想では、市街地・市街地周辺・郊外という3つのパターンで建設地を想定していたが、用地の取得が確定していないため、展示計画について議論することは難しいと事務局では判断し、そのため活動計画を先行して審議していただきたいと考えた。

しかし、委員からは修正はあるものの、どんな場所になってもいいような基本計画（展示を優先して検討する）をつくるべきだという意見があり、そのためにも造りたい博物館のイメージがわくような素案を出すべきだとの指摘があった。そして、中長期的な計画ではなく、開館に向けて何をなすべきかという具体的な作業を明確にすることが重要であり、開館に向けた目的や展示テーマに対して助言するのが検討委員会ではないかとの意見が出された。

そのためにも事務局の素案づくりが重要になるが、名護博物館には十分な実績や資料があることから、今までやってきたことに上積みするイメージが現実的で時間もかからないだろうとされた。

<名護・やんばるの名称>

「名護・やんばる」という名称は、共通認識がなされないまま基本テーマなどですでに使用されており、新博物館の名称や展示テーマにとって大きな課題となっている。その点が会議でも話し合われたが、行政的な観点のほか地理学や民俗学、自然史など、分野ごとにさまざまな解釈ができることから、どのような使い方や位置づけをするかという明確な答えを出すことはできないまま持ち越しとなった。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

③ 平成23年度第1回検討委員会

平成23年8月2日（火）／名護博物館ギャラリー

出席委員（敬称略）：宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、宮城一夫、千木良芳範、末吉司、前田裕子

○ 建設候補地調査

用地選定における検討委員会の役割、候補地選定の経過、候補地の概要などを事務局が説明したあと5カ所の候補地を現地検分

○ 審議

<候補地>

名護市民のアクセスや利便性を考慮すると、現在の森林資源研究センターを推す意見が圧倒的であった。屋部や羽地、久志方面にある他の4ヶ所の候補地も、固有の歴史・文化・自然環境を考慮すると一定の評価はできることから、フィールドミュージアムにおけるサテライトとして、分館機能を持たすことができないかという意見もあったが、財政や人員配置面などから実現は難しいとされた。

森林資源研究センターは県有地であり、名護市が保有する土地との等価交換が実現しなければ、博物館建設も不可能となるため、土地の確保をめぐる議論が進んだ。名護市街地に残された自然林を含む4.1haの敷地はたいへん魅力的であるだけに、博物館だけの問題ではなく名護市の都市構想にどう位置づけていくのかという、大きなビジョンを他の部署の職員や市民で考える必要があるとされた。そのためにも、市民が強い思いを持って跡地利用計画を沖縄県に示す必要があるとの意見や、博物館をこの跡地に造ることの重要性を名護市の関係者にも強く訴えることが重要であるという意見が出された。

また、候補地の用地すべてを使うのが難しいのであれば、いくつか区切って他の公共施設と共用する案や、用地取得が頓挫した場合には2番目の候補地を次回以降に選定し直すことなども話し合われた。



5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

④ 平成23年度第2回検討委員会

平成23年10月18日（火） 16:00～17:30 / 名護博物館ギャラリー

出席委員：宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、宮城一夫、千木良芳範、末吉司、前田裕子、喜納すえ子

○ 用地取得の進捗状況

前回おこなった現地調査の結果を踏まえ、森林資源研究センター跡地を博物館新館の候補地とすることを改めて確認。5カ所の場所を最終的に検討した結果、森林資源研究センター跡地以外は考えられないという意見で全委員が一致。検討委員会としての推薦案として提出することとした。

その後、用地取得に向けての県や市との交渉、進捗状況について事務局が説明。

○ 審議

<計画の進め方>

これまで用地が決まっていなかったため、細部を書き込み辛い所があったが、用地問題が進みつつあることから、基本計画策定に必要な目次構成の事務局案を説明。用地決定後に基本計画策定としたいが、今後の基本計画策定工程を考えると日程的に厳しいものがあるため、ある程度の見通しがたった時点で具体的な審議を進めたいとの考えを示す。

委員からは、用地が決定してからしか審議が進まないのでは時間ももったいないとする声が多く聞かれ、名護市内部で合意形成ができた時点や、県と市で用地の等価交換について基本合意ができた時点、あるいは検討委員会だけでもやれることから始めてもいいのではないか、という意見などが出された。事務局では、用地取得に関しては決定が先送りになっている以上、現時点では森林資源研究センターを想定した博物館活動についての議論を先行して進めていただきたいと要望した。

<施設立地の考え方>

現森林資源研究センターは、土地が持つ力が強いので、地形や森・樹木自体が持っている力を、時間をかけて吟味しながら計画しなければならぬという意見が出された。魅力的な現在の地形や森林を活かしたいという思いは、委員全員の一致した意見であり、フィールドミュージアムなどの構想を反映するためにも、時間をかけた基本計画づくりが必要ではないかという認識が多く示された。そのためにも年度にこだわらず、今後も基本計画づくりに関わっていくことをいとわない、という意見が各検討委員から出された。



5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

⑤ 平成23年度第3回検討委員会

平成24年2月28日（火） 16:00～17:30 /名護博物館ギャラリー

出席委員：宜保榮治郎、中村誠司、安里進、田名真之、宮城一夫、千木良芳範、仲原弘哲、末吉司、喜納すえ子

○ 審議

<用地取得の現状と検討委員会>

事務局から、博物館新館の用地取得に関する交渉状況について説明。

用地の評価額に開きがあるということで県との交渉が難航している状況だが、名護市としては金額だけで判断する等価交換ではなく、予定の土地が持っているポテンシャルを重要視したいとのこと。

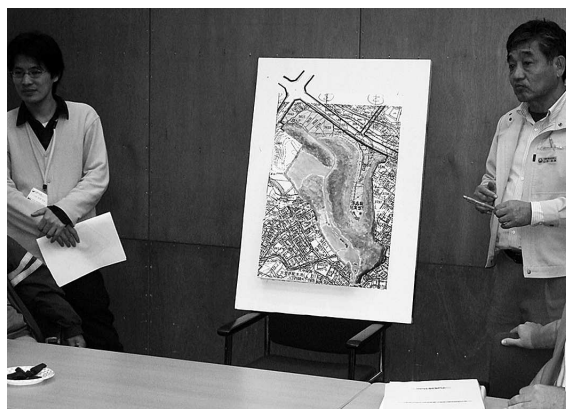
県が4月から進める「沖縄21世紀ビジョン」にも、やんばるの自然を活用して教育・文化を発展させると盛り込まれているだけに、多方面から候補地の価値を査定しながら調整を継続したい、と教育委員会次長からの発言があった。

検討委員からは、やんばるの存在は県としても無視できないので、有効な土地利用によって、現実の価格以上の価格が生まれるかもしれないという発言があった。そして、もし用地交渉がまとまらず、有効な利用計画も立てられなかった場合、候補地が民間に売り払われて住宅地になる可能性も出てくるとし、それより県立博物館・美術館の北部分館のような役割を持って、やんばるの教育文化活動に貢献する方が、名護市だけでなく沖縄県全体に有益ではないか、という論理を採用するとか、いろいろなアプローチで交渉して欲しいという意見であった。

その他、土地取得に関してさまざまな協議がされたが、用地の確保が確定しているわけではないものの、交渉を前進させる力にもしたいということから、施設管理や活動内容など、土地が変わっても続けられる議論を進めた方がいいという認識で一致した。

<活動計画>

自然とくらしという基本テーマにそって、名護だけではなくやんばる全体を意識し、海、まち・ムラ、山という3つのテーマで構成したいとする事務局案に対し、委員からは、山や川があるという土地の特徴をしっかりと生かした、他ではできないユニークで思い切った博物館にして欲しいとする意見が出された。同時に自然をどう見せるかが大きな要素だけに、コストや人員、展示手法などを考慮した自然の見せ方が重要との指摘や、市民参画を求める意見があった。



5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

⑥ 平成23年度第4回検討委員会

平成24年3月16日（金） 名護博物館ギャラリー

出席委員：中村誠司、宮城一夫、仲原弘哲、末吉司、前田裕子

森林資源研究センターを想定した作業を進めるという検討委員会の決定を受け、施設計画と展示計画について市民目線で議論し、博物館のあり方について検討。

○審議

<諸室構成>

事務局から施設計画（素案）の施設立地、施設配置、施設機能と必要諸室などについて説明。博物館活動をおこなう際に必要と思われる諸室配置や機能を想定したが、委員からは驚沢な数値が並んでいるという指摘がされた。

文化財係・市史編さん係との同居に関する質問がなされたが、建設場所・建設費が確定していない現状では、博物館としての判断は保留せざるを得ないとの返答があった。

また、膨大な文化財資料や公文書の保存が大きな課題となっていることは事実であるが、すべての資料を博物館で収蔵できるものでもなく、職員の体制や活動内容も異なるため、教育的な博物館活動との一体化は不可能とする意見もあった。しかし、博物館と発掘資料などが近い場所にあるほうが市民には便利なだけに、資料全部ではなく選択した資料の収蔵になるだろうと事務局から説明された。

食堂やカフェ、調理室、写真スタジオなどは運営コスト面から不要とする意見も出されたほか、企画室やレクチャー室、エントランス、駐車場などの面積・使い方などについてもさまざまな意見が輸出したが、博物館活動や建設予算次第という側面もあることから、今後も調整が必要ということであった。

また、入館料についても活発な話し合いがおこなわれ、教育施設として市民サービスを考慮しながらも、運営面から観光を意識した採算性も不可欠であろうとする意見が多数を占めた。

そして、市民サービスや学校との連携といった博物館活動を十分なものにするためにも、入館者の確保は必要であり、市民との関わりが深まることによって経済性が伴ってくるだろうとする意見もあった。

<学校連携>

学校連携のプログラムは面積や部屋割りにも反映されなければならない、ハード面だけではなく、体験学習などのソフト面の具休像を示す必要があるという声や、資料に示された活動内容が多すぎるという意見があったが、事務局としては開館までですべてやることを考えているのではなく、中長期的に進める活動も計画案に盛り込んでおり、それらを友の会や市民に参画してもらいながら進めたいと考えており、これまで継続している「ふりでい子ども博物館」の事例を報告し、現状の学校連携は、部屋の面積、人員、送迎などの面で課題が多いと説明した。

以上の課題が、新館になった際に解決されるためには、職員体制だけでなく、プログラムの内容や準備を今のうちから進めることが必要という指摘があり、現在の名護博物館で好評な、子供たちが自由に出入りできる半屋外のスペースはアフタースクールの環境としても重要であることから、継承する方向が確認された。

また、先進地視察でみたような、学校から先生を博物館に派遣して常駐してもらい、学校連携をスムーズにする「ミュージアム・エデュケーター」のような工夫があることも事務局から説明された。

そして、学校連携や市民参画を進めるためにも、博物館業務のサポート体制やシステムを構築することが急務であるとする意見が多く出された。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

(4) 検討委員へのヒアリング

日時：成24年3月19日（月）～21日（水）

○立地

- ・ 森林資源研究センターは、学校などの教育施設が近いという理由以上に、自然観察や体験学習の場となる自然環境が身近にあるため、博物館活動の展開しやすくれた優位性があるほか、やんばる全域に誘うガイダンス機能も十分に果たせる。
- ・ 市街地に近い場所でありながら、ある程度の自然にも触れられるにはこの場所が適当である。

○施設計画

- ・ 住宅地が博物館からストレートに見える部分は植栽でカバーして、周りの生活感を感じさせない配慮が必要。
- ・ 南西側では植栽によるカバーが難しいので、民家の復元場所は谷間を挟んだ反対側に固めた方がいい。
- ・ 過去が未来にどうつながるかということを実験的に見せる場があっていい。太陽光発電・小水力発電などや、いろんな仕掛けを民家エリアに造ってもいい。それが3.11以後の博物館が目指すものである。
- ・ 博物館と文化財や市史編さん担当の配置は、それぞれの業務が確保されにくくなるため、別個にする方がいい。
- ・ 諸室のゾーンごとのトータル面積はきちんと記入する必要がある。全体のバランスが重要。

<収蔵庫>

- ・ 廃校となった小学校の旧校舎などを利用して、とりあえず大収蔵庫を確保する。
- ・ 博物館では資料室（収蔵庫）が一番の問題。展示室と収蔵庫は五分五分の比率。
- ・ 収蔵庫は何をどこまで収集するのか検討しないとたまる一方になる。自然系の調査研究を名護博物館の特徴にして充実をはかると、それなりの収蔵庫も必要。
- ・ 地域に残された美術作品をどうしていくのかも問題。寄贈されたものの収蔵は特にたいへんになる。

<エントランスホール>

- ・ エントランスホールでイベントや大がかりな企画展も出来るといい。村の伝統的な踊りを見せるとか。

<市民ギャラリー・企画展示室>

- ・ 市民ギャラリーは企画展示室との兼用を考え、面積を少し広めた部屋を一つにしてもいい。
- ・ 市民ギャラリーのニーズは非常に高いので、パーティションで区切るような工夫をして、面積を効果的に使う。
- ・ 市民ギャラリーが一番多く使われる。1つだけではバッティングする。数は3つぐらいは欲しい。大規模なもの1つに小規模なもの2つぐらい。
- ・ 企画展示室は企画をしていない時にどうするかを考える必要がある。ギャラリーと連携して兼用してもいい。

<講座室>

- ・ 講座室（レクチャー室）は、パーティションを使って仕切ったら隣の音が邪魔で使い難い。100人ぐらいと30人ぐらいで使える部屋に区切る方がいい。または少人数に限定し、大人数の場合は市民会館にすると決めれば、50人規模の講座室を3つぐらいにしてもいい。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

<カフェ・レストラン・食堂>

- ・ いずれかは絶対あった方がいい。リラックスできる場所で人は和むので、建物の片隅に置くのではなく、一番見晴らしのいい場所で風景を見ながらリラックスさせることを考える。博物館と市民を近づけるという役割もカフェにはある。その機能をきちんとはたせれば、一定の利用が見込める。
- ・ カフェや食堂の運営は婦人会などに委託して、少々の利益でもいいものを提供するような工夫をすれば、さらに客はリピートする。飲み物だけではダメで、季節のメニューなどを取り入れた軽食も提供する。
- ・ 館は6時、7時に閉まっても、施設全体は街灯などの整備で夜まで市民に開放できるようにした方がいいかもしれない。公園みたいなイメージでカフェなども屋外に設置する。全体を真っ暗にする方がかえって危ないかもしれないので、使うことで逆に安全性を高める工夫をする。

<その他>

- ・ 調理室（実習室）で昔の食事を再現して作るとかできるといい。
- ・ 暗室はいらないが、資料等の撮影場所としてスタジオは必要。
- ・ シャワー室はどこでも使っていない。必要ないのではないかな。
- ・ 文書や掛け軸などの修理、補修をおこなうスペースも必要。道具類などを持ち運びすることは出来ないなので、技術者が作業する場所となる。
- ・ 芸能などは市民会館などを活用すれば博物館でやらなくてもいい。屋外劇場は市民会館がいい。
- ・ 展示がらみの準備室があると、展示に使ったもの（看板や構造物など）を保存する時にも役立つ。常設展示室などと扉1つでつながっているとすぐ運べて便利。
- ・ 会議室が1つは少ない。150㎡をいくつか区切って使えばいいかもしれない。
- ・ 応接室は館長室とセットになっている例もあるが、どんな客が来るかもしれないので、豪華でなくてもいいがそれらしい部屋は必要。

○展示計画

- ・ 「くらしと自然」を具体化したもので、焦点を絞って展示テーマがストレートに伝わるような明快なものを心がける。
- ・ 歴史展開は時間軸にしない方がいい。名護・やんばるのくらしと関係づけられるモノを考古・歴史・自然とつなげていく。関連付けられないものは展示しなくていい。やんばるの自然環境のなかで経験の蓄積や技術が蓄積され、現在のようになったということが理解できる展示。歴史全体を教える必要はない。
- ・ 程順則はくらしの中の精神的な側面として位置づける。現世のなかの身の処し方、儒教の生き方の一つとして、程順則の教えもあの時代には意味があったということを示す。農業・漁業を行い御嶽を信仰するくらしのなかで、こういう思想もあったという意味付けがふさわしい。
- ・ 海のくらしはその起源が貝塚時代にあるものも多い。そういうモノの起源とかを一緒に示す。
- ・ ジオラマを造るとすれば、戦前から戦後ぐらいで考えた方がやりやすい。以前からの蓄積があるので、それをひも解けば歴史を見ることができる。戦後まで残るいろんな時代の片鱗を切り取って見せる。
- ・ 小川の小さな水車でも何軒かの電気をまかなえる。これからの水でこれくらいの電気が発生するという、原理原則が子どもに理解できるといい。谷間の暮らしは過去の再現ではなく、未来にも向かっているおじさんがそこに住んでいるイメージ。
- ・ 名護グスクのジオラマ製作は可能。想像性を加えて斜面にある屋敷も再現すると一般の人にも実感が伝わる。調査の途中の「現段階」のイメージでいい。名護グスクを再現してグスクの意味を考えたり、今帰仁城と比較したりすると非常にいい。
- ・ 蔡温の中山山政策の話などもいい。やんばるの自然は地域住民を動員し王府のために守らせた。有用な木を植えて管理しながら次世代につなげる体制を作り上げている。中南部はやんばるに頼っている。
- ・ 屋取集落の話を詰めていくと、その典型的な場所も分かってくる。山や集落と屋取との関係を念頭におきながら、地元民の生き方と、よそからやって来た人の生き方の違いとかを、山との関係のなかで示すと面白い。
- ・ 名護・やんばるの人物は、歴史ではない所で取り上げた方が面白い。名護にとって重要な人を何人が取り上げる。名護との関わりが薄いならあまり入れない。程順則はみんなが知っているので深入りしなくていい。名護にとって大事な人、地域で頑張った人でいい。比嘉宇太郎とか宮城真治とか、全国的に知られていなくても名護が生んだ人として後世に伝えたい人を取り上げる。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

- ・ 羽地大川を取り上げて蔡温を関連づけてもいい。どれだけの人が名護・やんばるに住んでいて、どれだけの人間が動員されたとか人口統計とかも使って示す。写真も使えるし想定図も作れる。土木工事や河川工事に強い工学系の人々がどう評価しているか聞くと、歴史では気がつかない話があるかもしれない。
- ・ 海の表現でもメインは人のくらしで、両者をつなぐ意味でクジラやリーフやそこに棲む生き物があるから、天仁屋の褶曲などは全体の中に位置づけなくて、トピックス的な扱いでいい。
- ・ 人の部分はもう少しやって欲しい。名護から出た偉い人を、自分たちの先輩として子供たちに教えたほうがいい。トピックスでも、名護人物列伝のような形でもいい。市町村では地元からどんな人が出たのかは重要で、単純に時間軸ではなく、そこから歴史に結びつけていくというやり方もある。なぜそういう人が育ったのかを「自然とくらし」を背景に考える展示が、近世・近代では出来るかもしれない。
- ・ 展示は遊びながらで、しっかりした勉強は展示解説書でやればいい。展示が教科書的になると面白くなくて途中で引き返す。感動と発見がないとダメ。
- ・ 「海・集落・山」の区切りはあいまいでもいい。なぜ名護にクジラが来るのかを説明するとき、地形的な話やクジラを捕るなりわいの話もあるし、海辺の人のくらしもそこで紹介できるかもしれない。気がついたら三つが連続しているという方がつながりやすい。その中で人物などもつなぐので、展示は一方通行でなくていい。
- ・ 開発と保護の問題に触れる場合は、博物館は中立の立場をとる。「こういう事実があるがあなたはどう思うか？」という出し方ができない。事実を何も知らせないでは役割の放棄になるので事実は正確に伝えるが、賛成・反対の判断は見る人にゆだねることになる。
- ・ 漁場の地名や名前は大切。現在は忘れ去られている。
- ・ 愛楽園も国の施策であるので、どこかで触れなければいけない。1コーナーでいいので展示する。
- ・ チリ津波の実態を調査・記録し、そのデータを活かすことも重要。
- ・ 国道や県道の発達、交通・運輸の問題は重要。戦前は今帰仁が名護より栄えていた。名護が栄えたのは機械船が出てからで、交通の便がよくなって名護は発達した。
- ・ 名護の産物、地域の特産品（アイとかタキギなど）も紹介する。
- ・ 教育、学校（農学校・三高女・三中など）も大切。
- ・ 年中行事を映像で見せる方法もある。最近はいろんな機器ややり方があるだろう。いろんなデータを収集していれば何かの時に使える。
- ・ お年寄りの話を収集しているなら、音声、方言をちゃんと聞かせるのもいい。戦争体験もあるが、地域にいる人に語ってもらって方言を楽しませる。映像の問題もあるだろうが、方言をまずはちゃんと聞かせたい。

<古民家>

- ・ 古民家を使っていろいろな稽古や発表会などにすることも活用できる。

<フィールド>

- ・ フィールドミュージアムとして森林資源研究センターは最適。「屋根がない博物館」を補完するものとして屋内施設を考える。
- ・ 里山的な意味付けで、水田・畑には在来種を植えて、市民や観客、学校の子供たちに管理させる。
- ・ 測量器は再現できるところまでできている。税金を取るためのシステムだったことなどを体験的に学ぶ場にすれば、歴史だけでなく科学的な知識も得られるし、経営や税金などのいろんな問題を考えられる。
- ・ 本屋敷がある集落に行くまでに、作業小屋などがなくて風景が生きない。斜面は段々畑にして、いろんな有用植物を植えたらいい。やんばるの畑の特徴は段々畑、焼き畑だから、今の地形を使ってやれる。
- ・ 田んぼ、ピオトープは野外体験場でやる。ピオトープは水のある時期とない時期があるので、一年中同じ状況にすることは無理。状況に合わせた生き物サイクルが本来のピオトープ。水のない時期には生き物は何をしているのかとかを紹介する。
- ・ 外来生物の問題は、生物多様性の話と絡めながらその大切さを理解させ、生物がたくさん棲む大切な自然を壊しているのが外来生物であるという話の流れをつくる。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

- ・ 生物多様性を理解させる工夫として、喰う喰われる関係、食物連鎖でつながりあいを理解させてもいい。命を食べて生きることが生物の関係を複雑にしているということでもあり、生物がたくさんいるということは人間が幸せに暮らすために重要であることを、くらしとのつながりのなかで理解させる。自分とどれだけむすびについているかを教えるのが博物館で、お互いが目に見えない所でつながりあっていることを気付かせる。

<その他>

- ・ 名護でヒートクーを食べることを排除するというのは間違い。地域の文化として認識しないとイケないし、それは時代とともに変わっていく。かつてはこうだったということで、悪い事をしてきたという展示をやってはいけない。フルなども高度な循環型社会のモデル。有機肥料を循環させて再利用する先駆的システムとして理解し、遠慮することはなく堂々と見せる。

○資料収集

- ・ 博物館が動いている状態を計画することが重要。そのためにも個人では収集できない現代資料を公共財産として位置づけ、市民参加の「ぶりでい」で調査・収集する。
- ・ 建設地が決まるまで何もしないのではなく、市民参加の現代資料収集などはやるべき。大正始めから約100年間のことについていろいろなモノを収集する。
- ・ 博物館ができて30年間にわたる資料がたくさんあるので、それを使って、現在の人たちが興味を持つようなものを展示すればいい。
- ・ 収集も活動の一環として並行して行う。30年間の収集品に、新しい収集品も加えた展示会を開館前におこないながら、常設展につなぐ。計画に合わせて集めるのではなく、すでにあるものを展示に持っていく。
- ・ モノを集めた博物館を造ることで、名護・やんばるの文化レベルが活性化することも重要。
- ・ 現代生活資料あるいは戦後生活資料とした項目を設定して収集する。本物の資料を見ながら、自分たちの暮らしを再吟味して、何を伝えていくべきか、ということを考えてもらうことが重要。
- ・ オープンな資料提供を呼びかけるなど、博物館からの積極的な働きかけがほしい。
- ・ たとえば重要な人が亡くなった時などに、すぐ資料をもらってくるような働きかけをするべき。
- ・ 道具の変化を見せることも重要。変遷の中で何が起こったか、その過程のなかで先人たちがいかに知恵を働かせたかを教え、将来どうなるのというところまで考えさせる。
- ・ 歴史・民俗・考古・美術工芸に加え、現代・戦後・生活・資料というキーワードを組み合わせた収集が必要。戦後資料を積極的に集めることでテーマを具体化したい。
- ・ もっともっと資料を集めるということを新館のテーマにし、スペースの不足分は学校跡地のような、空き施設も有効利用する。

○展示構成

<考え方>

- ・ 過去と未来をつなぐという博物館活動の役割に、自分とつながる「今」をどう取り込むかが重要で、回顧主義で「昔の人は偉かった」と終わるのではなく、昔と今をつなぐストーリーが必要。
- ・ 「山、まち・ムラ、海」というそれぞれの環境単位で空間を構成する事務局案に対し、名護間切、久志間切、羽地間切という3つに分けないと個性が見えてこない。
- ・ ムラ・シマごとにパターンが異なることがやんばるの個性。間切ごとの文化に、村の移動と誕生などの要素を加えてはどうか。象徴的な集落パターンではなく、自分が住む個別の集落だからこそ人を引きつける。
- ・ ムラ・シマの形で市内の55の字の個性が見せられないか。すべては入らないので、いくつかのモデルになるものを展示する。ムラの個性は何か、という見せ方の方がこれから有効だろう。
- ・ 字をベースにすることで、現在の記録も将来に向けての目処になる。羽地内海に面した村、名護湾に面した村、東海岸に向いた村、それぞれの個性が重要。三つの共通点や違いは何かということを読み解く。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

- ・ 字ごとでやった方が整理しやすく、市民の関心も高い。
- ・ 学校連携による子供たちの参加は、祭りや集落の勉強を通じることにつながる。
- ・ 祭り、豊年祭に関しては、ともすればステージに集中しがちだが、年間を通した村の祭祀行事のなかでとらえることが重要。
- ・ 言葉だけで「未来に向かう」と言うのではなく、「どうしたらいいんだ」と言う時に、博物館で過去を振り返ると何か展望や方向性を示せるというためにも、具体的な道筋や取り組みを蓄積することが重要。
- ・ 昔の民家を移築しても、その意味を学芸員が説明できないといけない。昔の人たちのくらしの知恵がここにあり、それは私たちの現在を考えさせるためであると説明出来なければ、ノスタルジックな展示にしかない。

<導線>

- ・ 海の方から入って斜面に沿って上がっていく導線は、エントランスからまち・ムラに行って海や山に行くという展示計画と矛盾する。
- ・ 最初のイメージは下（海）の方から砂浜に上がって、傾斜地をエスカレーターで上がって集落や山にいたるといったものだった。
- ・ 集落の方にまず入るとなると「海」は下がる。人は登るのは嫌がるからそれなりのルートを造っておかないと、元には戻ってこない。
- ・ まずは「くらし」から入ること。最初に「まち・ムラ」から入り、そのくらしを支える「山の自然」「海の自然」があるという考え方がいい。
- ・ 順路が強制なのか自由なのかは博物館の考え方だが、迷子を出したり、見ても意味がわからないという人を出さないためにも、見学コースを提示する等の補助は必要。
- ・ 展示の方針、テーマは明確にしておかないと、見終わって何を見たかわからないことになる。

<生物多様性>

- ・ 生物多様性では、いろんな動植物が海や山にいて、それが名護のまち・ムラのくらしとこんな関係があったということを見せる。いろんな生物がいるから、いろんなものを名護の人たちは食べ、バラエティー豊かな食生活を送ることができたというような形。貴重な生物はオマケでいい。貴重な生物がいっぱいいる、というようなことは避けて欲しい。
- ・ やんばるの山奥に貴重な生物がいるというのではなく、われわれの身の回りにいろんな多種多様な生物があふれているようにしよう、というのが生物多様性。
- ・ 屋外展示のピオトープは見せ物的な展示ではなく、生物のサイクルを見せる本来のピオトープとするべき。

<大型地図>

- ・ 沖縄の全体像と名護・やんばるの位置を確認させ、全体像を俯瞰するためにも、壁面に大きな地図を展示する必要がある。

<展示替え>

- ・ 常設展示に変化をつけることも飽きさせないためには必要ではないか。
- ・ 常設展の展示替えは手間がかかるほか、部分的な変化では気付かれにくく、担当者の異動もあることから継続的な計画が立てにくい。

<その他>

- ・ 常設展示ですべてを見せるのは不可能。月別に各地の祭りを入れ替えていくようなことを始めから想定したらどうか。それを「集落」や「海」「山」とのつながりに入れる。企画展の資料を常設展に使ってもいい。
- ・ 谷間が使えるということの価値があるのに展示案に活かされていない。自然、屋外展示を充実させるためには、この土地でなければいけない。
- ・ 野外展示、生態展示についてもう少し強くアピールしていい。
- ・ 「収蔵展示」というのは共通理解、共通イメージができていない。
- ・ 方言テープなどの資料もたくさん残されているので、それを利用した音の展示が欲しい。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

○市民連携

- ・ 新博物館の活動は規模も内容も現在より拡充されることが予想されるが、それに対応するためにも市民や関係団体などの連携が不可欠。
- ・ 博物館をみんなで造るプロセスが面白い。それが「ぶりでい」であり博物館の理念、方法。
- ・ 博物館のことを市民は知らない。もっと知らしめる広報などが欲しい。
- ・ 博物館の資料整理などを市民レベルでおこない、それを博物館がバックアップするといい。市民主体の地域調査を博物館が後押しするための作業スペースが館内に欲しい。

○学校連携

- ・ 博物館から幼稚園や保育園（就学前）への働きかけはとても大事。この年代が一番大事。ここをきちんとやらないと、リピートする人が生まれ難い。
- ・ 学校で博物館を必要とする場面もあるので、どこでどのように活用できるかを博物館からアタックしてはどうか。活用できるような形が続いていけば、開館した時に年間計画に組み込んだ連携の形ができる。
- ・ 移動博物館なども利用し、博物館が持っている資料を学校で活用することも重要。市民ややんばるの人たちがエネルギーを得られる拠点であり、子供たちとの連携で世代を超えて引き継がれる博物館造りが重要。

○施設計画

- ・ 森林資源研究センターの全部の利用を前提とする。
- ・ 関連公共施設との共存は名護市の建設計画が前提になるので、この場で検討するわけにはいかない。

<駐車場からのアプローチ>

- ・ 初めての入館者には坂道の林道を歩いて本館に入るのもいいが、何回も来るようになると遠いことに苦情がくるようになる。雨の対策も必要だろう。
- ・ 博物館や美術館はそこに入るまでの雰囲気がとても大事。駐車場から入口にストレートに入る必要はない。便利さではなくて、気持ちのいいアプローチで雰囲気をなごませることが大事だろう。
- ・ 通常のアプローチの部分と、団体利用者、土砂降りの時などの非常用の入口とを考えた方がいい。
- ・ 現在の坂道はいい雰囲気なので、その上の方と谷間の方に集落を造り、今の施設の下の方の斜面から谷間を回って駐車場に戻るパターンができる。駐車場に降りやすいような出口を造ってしまうと、谷間を回らないでそのまま帰ってしまう。
- ・ 館内に入る時には便利な方がいい。建物に入るとその奥に何かがある、「海」や「集落」があると期待する来館者にエントランスまで歩化せるのはどうなのかと思う。駐車場に着くとやんばるらしい雰囲気があってすぐ館内に入れる。そして、館内に展示が広がっているという流れがいい。

○管理運営

- ・ 指定管理方式で民間のノウハウを入れ、集客、活性化につなげたいという流れがある。現実にはうまくいっていないようだが、名護博物館が直営にしたいのであればそれなりの根拠が必要。
- ・ 行政がみんなできるわけではなく、民間にまかせないといけない局面もある。行政にできないサービスなどは民間・市民の方が向いている。
- ・ 指定管理だと店舗、カフェなどは赤字になる可能性が高い。博物館としての制限もあるので業者とぶつかることもある。雇用の権利や営業権という問題も伴ってくるので考慮した方がいい。
- ・ 中長期的な調査研究のためにも直営にしたいという話は、調査研究できる人間を指定管理者が雇えば問題とならない。
- ・ 博物館が全部まかなうという考えで、学芸員が何でもやるのではなくて、応援団を組織した方がいい。企画展などでも編集委員会のような組織を作って進める。外の力を借りるやり方を考える必要がある。
- ・ 部分的には民間の指定管理を利用する両者併用がいい。基本的には直営だが機能に応じて民間に委託するという柔軟な対応。
- ・ 社会教育施設だから収益は考えないが、それでいて直営でいきたいと言われているように感じる。公費を使うわけだから、誰のための博物館かということをもう少し考え、明確にもらえるのとありがたい。

5. 新名護博物館基本計画策定委員会の記録

- ・ 指定管理者は、市民の財産として、将来の長期的な視野に立った資料収集を行っていく。また、指定文化財を含む貴重な資料の保管や調査研究などは、直接的な収益につながらないので、積極的な活動を行っていく。特に学校連携としての学習支援等は、これから新博物館の重要な活動のひとつなので、指定管理者側から学校へのアプローチが必要で、民間企業ではより困難な状況だと考えられる。
- ・ 指定管理にして民間だったらできるというのは勘違い。民間にまかせれば大丈夫という話でもないだろう。
- ・ 指定管理方式で公募しても、今度は応募する所がないという事態になることもある。それで結果的に直営になる可能性もある。
- ・ 指定管理者が儲かる可能性はあると思われるが、現実には儲からなかったことも多い。公共的な社会教育施設は法律にも縛られているので勝手なことができないため、それなりのレベルで儲かる仕組みをどう考えるかが問題。本当は指定管理だろうが直営だろうが同じで、赤字にしないためにはどうするか考える必要がある。
- ・ 儲からないと最初から放棄するのではなくて、市民参画によるまちづくりや、やんばる型農業や産業に資することで博物館活動を必然化するような努力をする。

<組織>

- ・ 教育普及は学芸部門から独立させた方がいい。学芸部門で調査研究の片手間でやれる仕事ではない。市民や学校との調整、プログラム作りなどは管理運営でやり切れない。専属のセクションを置いた方がいい。
- ・ 職員が13人体制というのは難しい。
- ・ 指定管理方式では、指定管理者を管理する職員が1人必要。その人員は始めから想定していた方がいい。

<埋蔵文化財・市史編さんとの共存>

- ・ 博物館と同じような仕事をしているようでも仕事の内容や予算の出所が異なるため、博物館との同居は難しい。

6. 施設立地と展示計画資料

(1) 建設候補地の地形的特徴と利用区分

A 幹線道路前面角地平坦部

幹線道路に面した交差点角地

B 幹線道路前面平坦部

駐車場機能を想定。加えてC・Fとの接合をスムーズに演出する空間として設定する

C 法面林野部

かつての地形・森林樹種残存地。これらの貴重な地域資源を保存・利活用した施設設置を工夫する（施設建設にあたっては法面造成が必要）

D 台地上部平坦部1

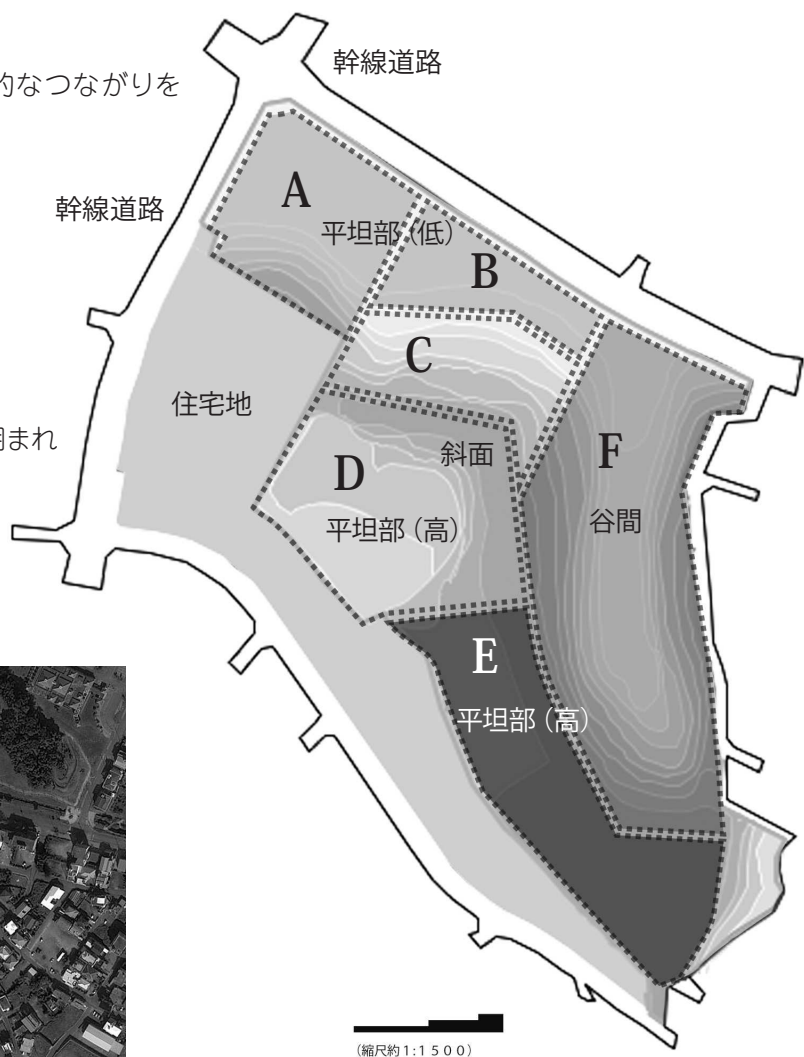
Cの斜面から平坦部への地形的なつながりを利用した施設建設が望まれる

E 台地上部平坦部2

Dに接地する施設建設候補地

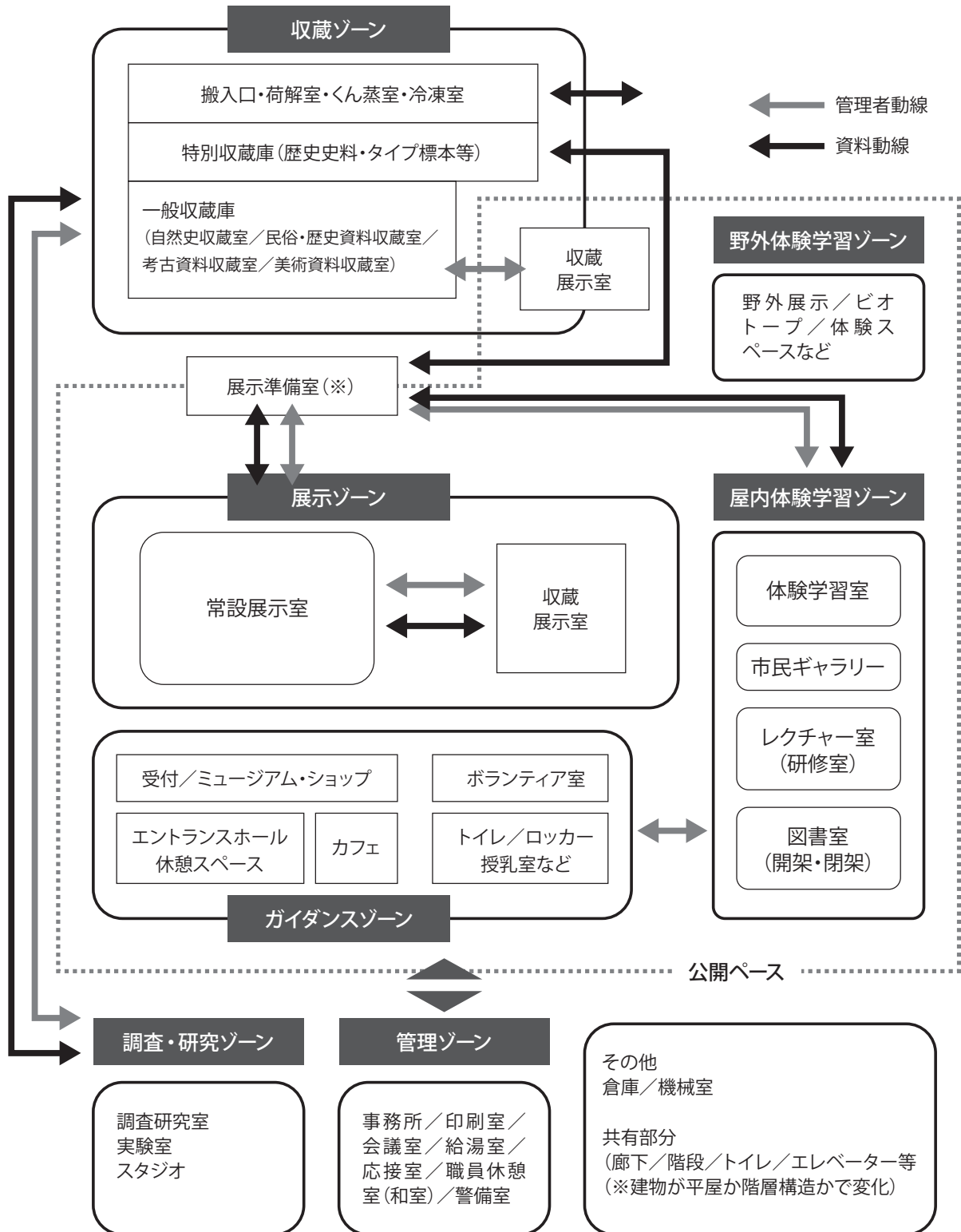
F 谷状法面林野部

豊富な樹種が密集した斜面に囲まれた谷間。残された自然環境を保全・育成しながら、博物館活動の屋外体験の舞台とする



6. 施設立地と展示計画資料

(2) 施設配置のイメージ



6. 施設立地と展示計画資料

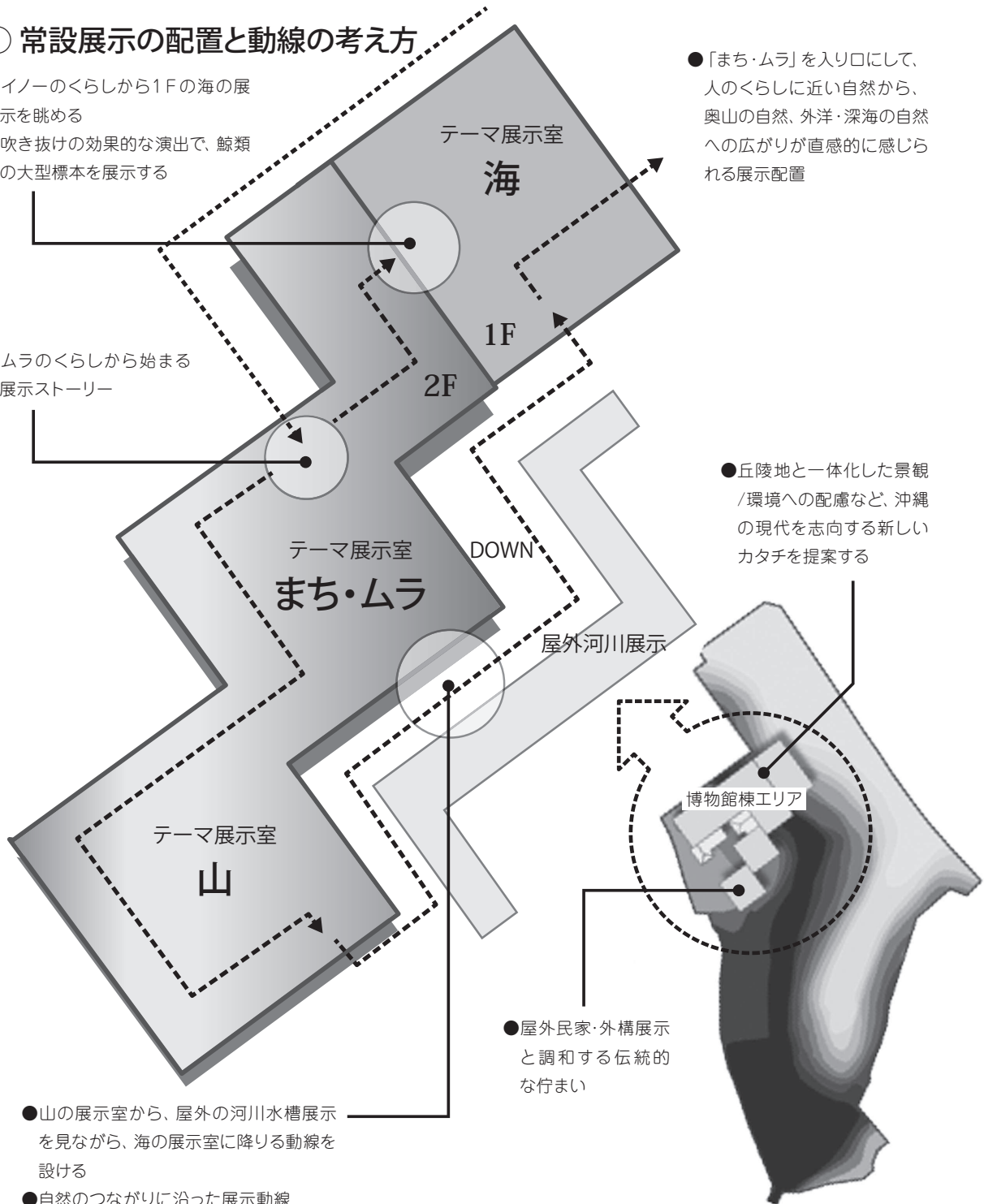
(3) 施設建築案 A

「海ーまち・ムラー山」の連なりをコンパクトにまとめ、多様なアイテムを効率よく展示できるほか、屋内・屋外の活動にも柔軟に対応。

① 常設展示の配置と動線の考え方

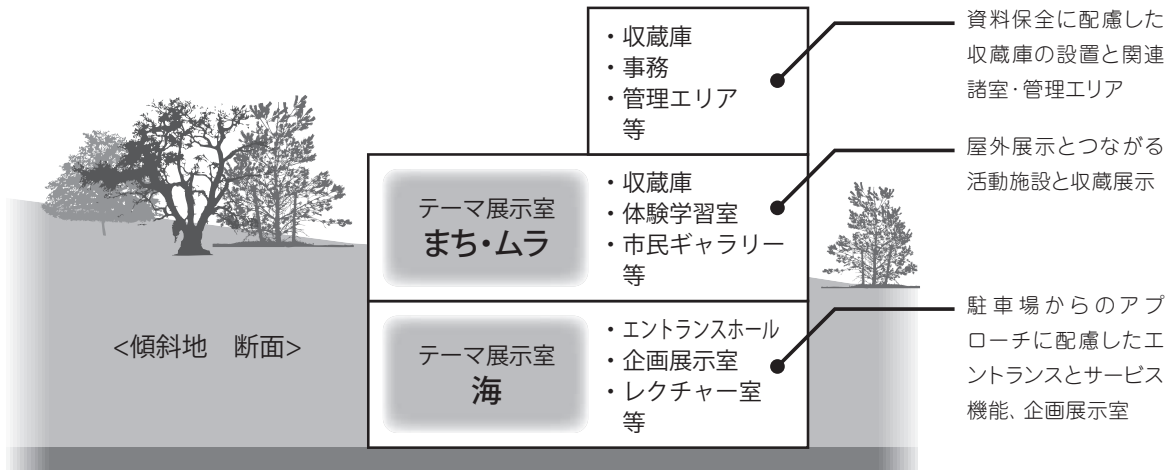
- イノーのくらしから1Fの海の展示を眺める
- 吹き抜けの効果的な演出で、鯨類の大型標本を展示する

- ムラのくらしから始まる展示ストーリー



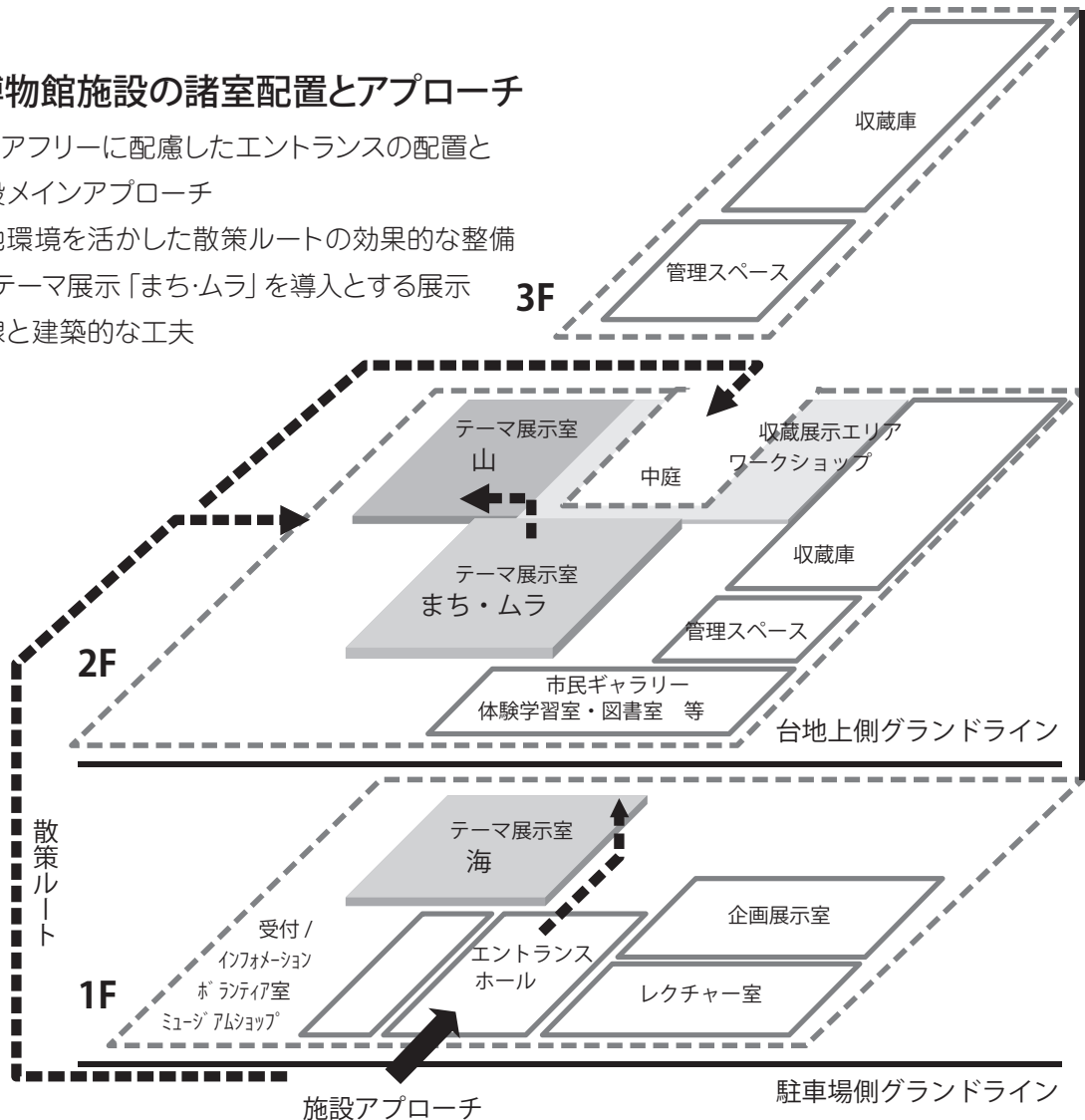
6. 施設立地と展示計画資料

② 傾斜地を利用した博物館施設配置



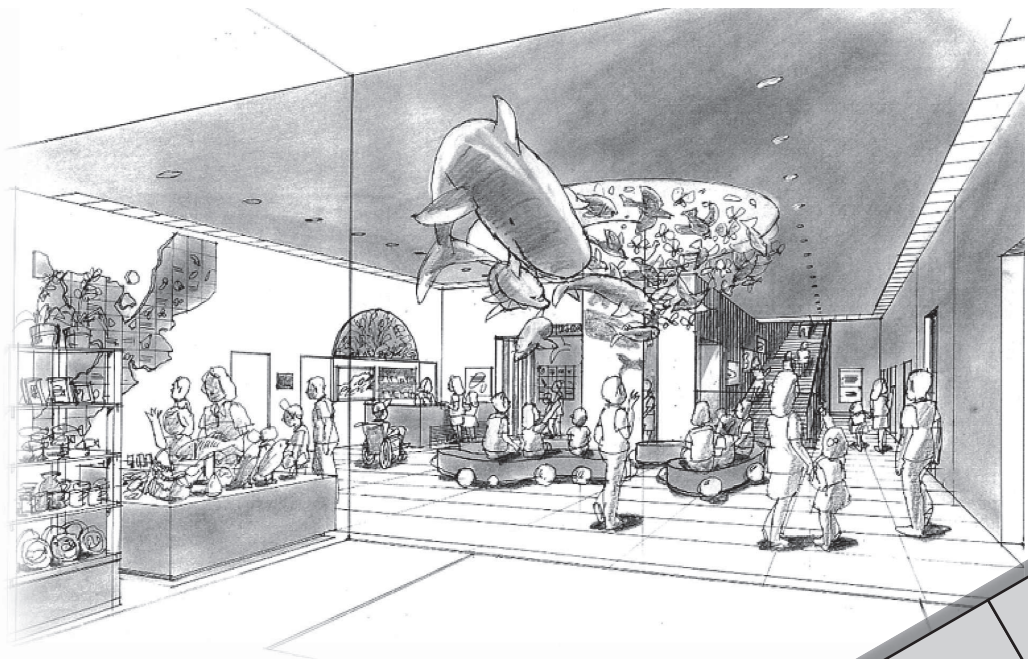
③ 博物館施設の諸室配置とアプローチ

- バリアフリーに配慮したエントランスの配置と施設メインアプローチ
- 立地環境を活かした散策ルートの効果的な整備
- 2Fテーマ展示「まち・ムラ」を導入とする展示動線と建築的な工夫

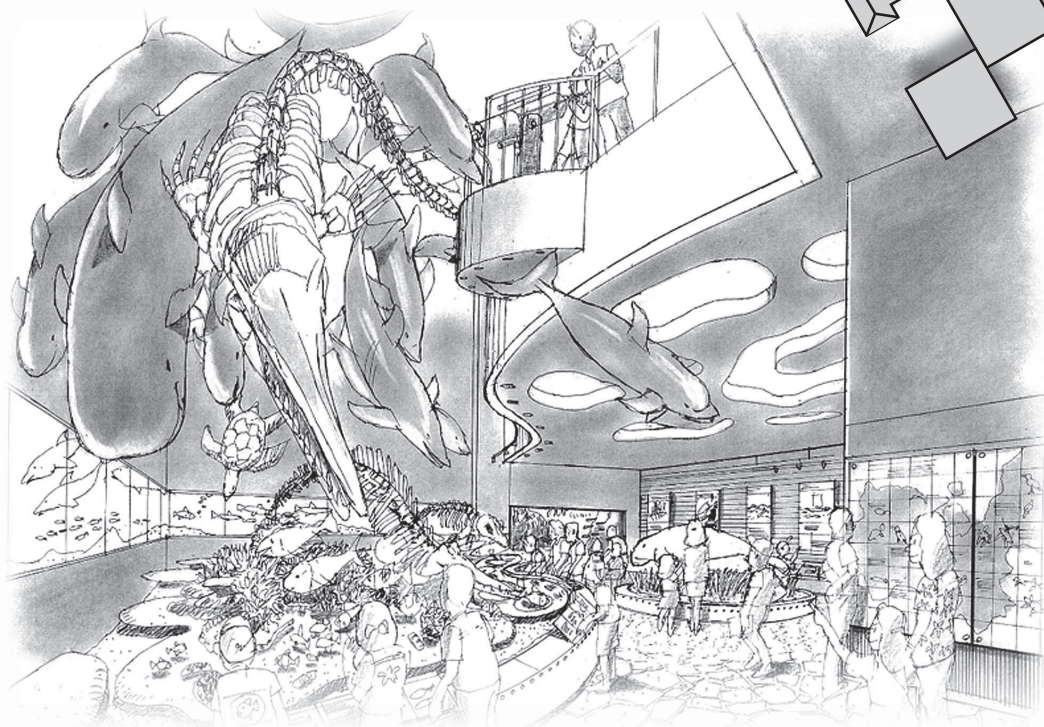
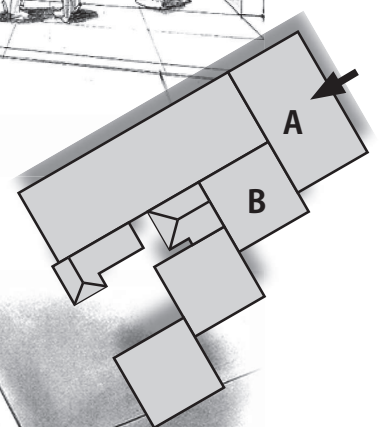


6. 施設立地と展示計画資料

④ 展示空間のイメージ

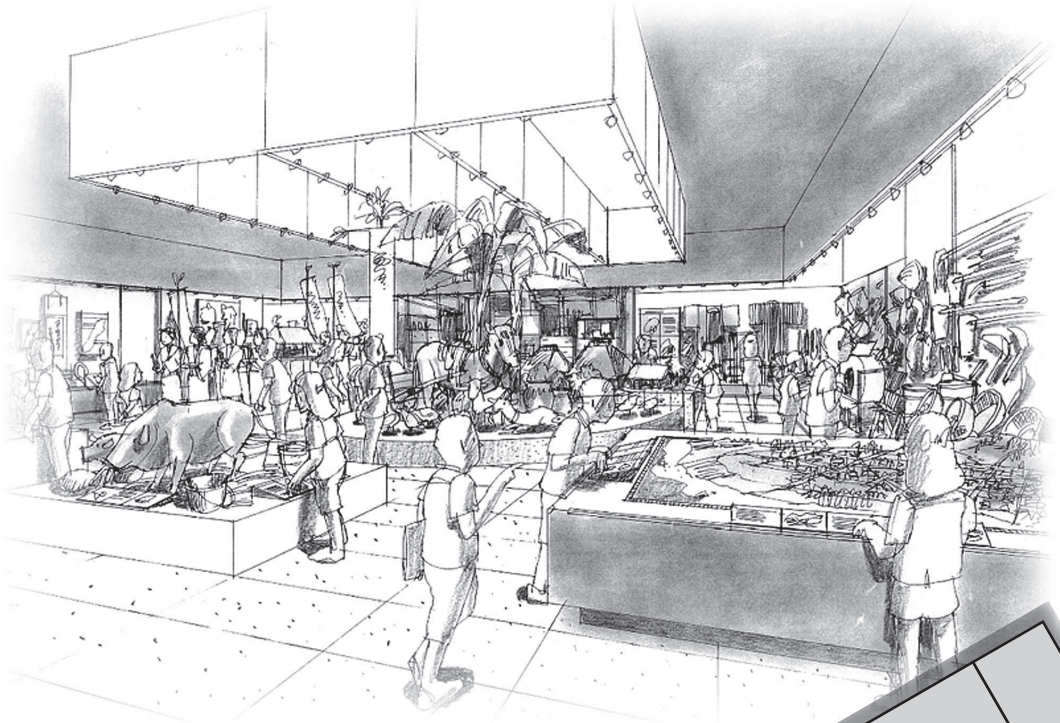


A: エントランス・ホールのイメージ

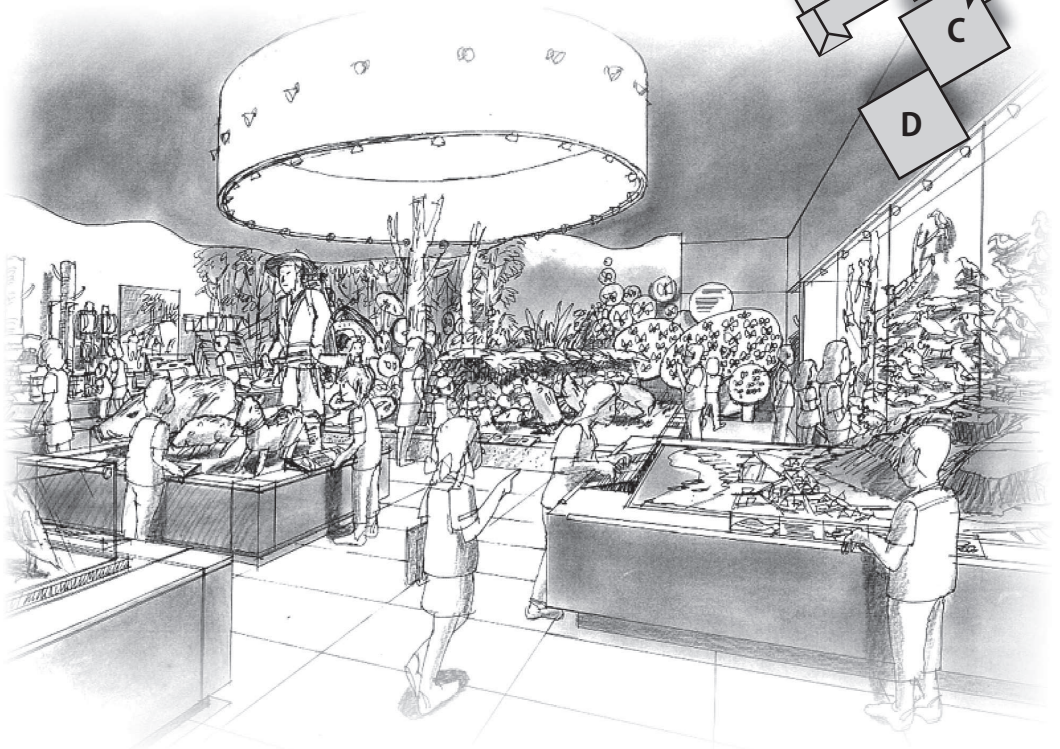


B: 1階常設展示(海)のイメージ

6. 施設立地と展示計画資料



C:2階常設展示(まち・ムラ)のイメージ

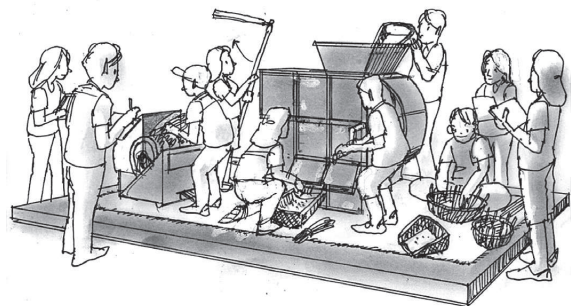
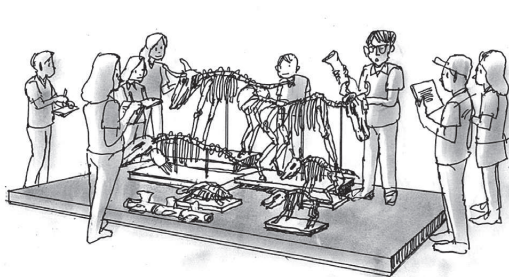
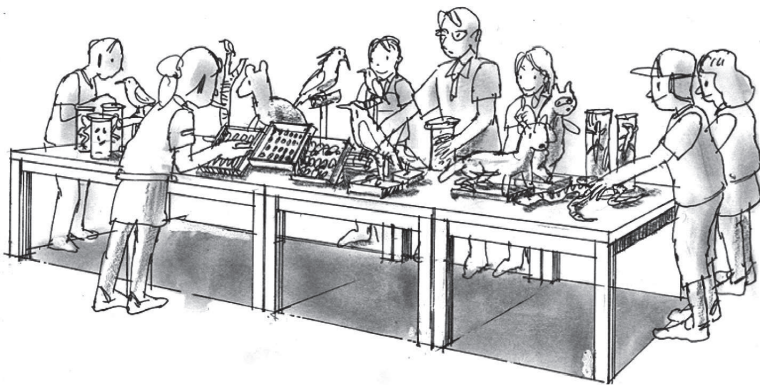
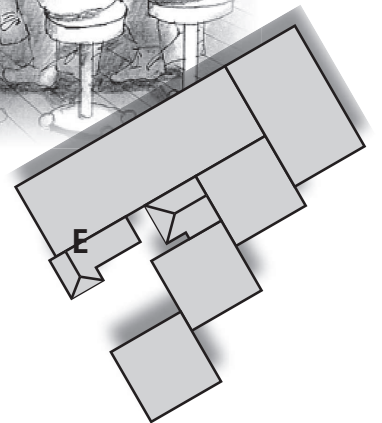


D:2階常設展示(山)のイメージ

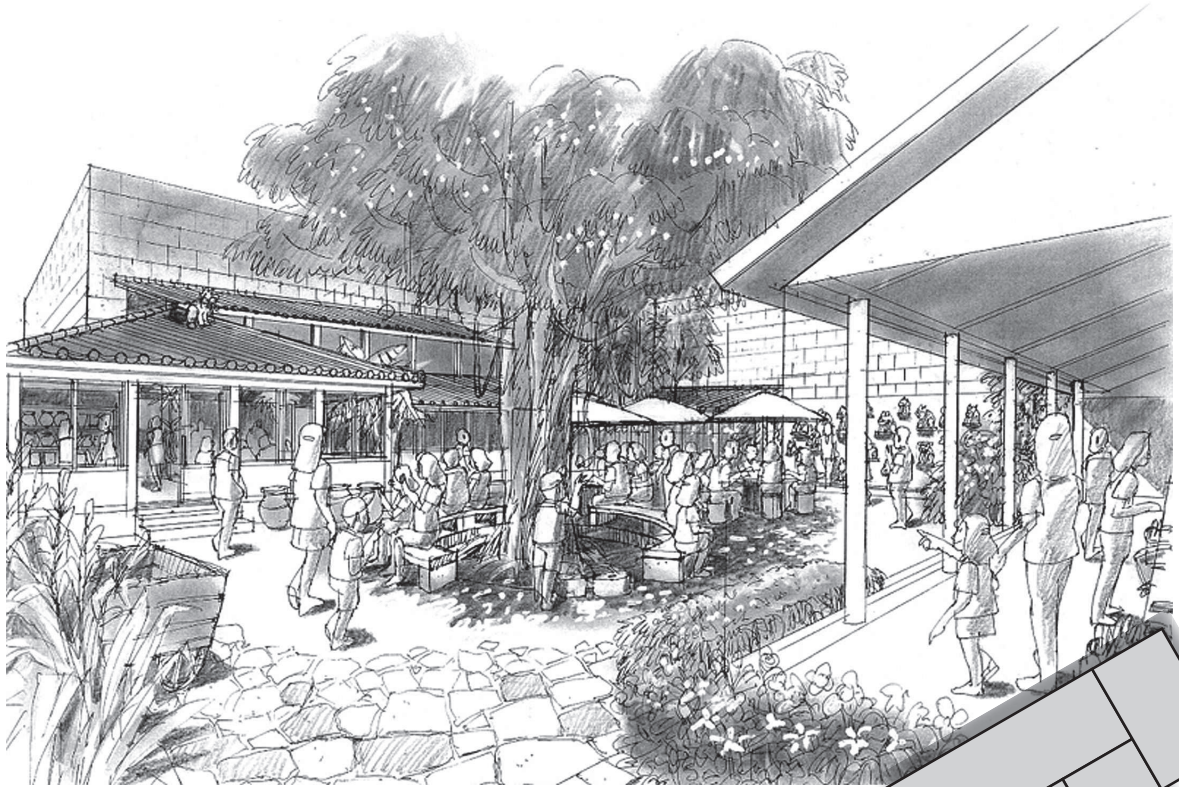
6. 施設立地と展示計画資料



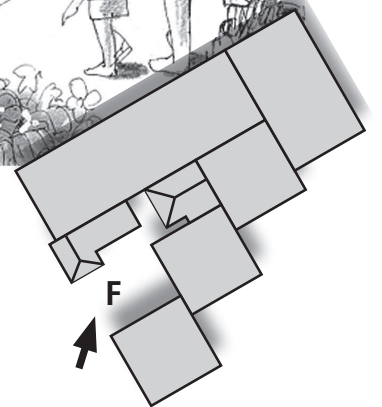
E: 2階収蔵展示室・工房のイメージ



6. 施設立地と展示計画資料



F: 中庭・工房のイメージ



6. 施設立地と展示計画資料

(4) 施設建築案 B

① 建築コンセプト

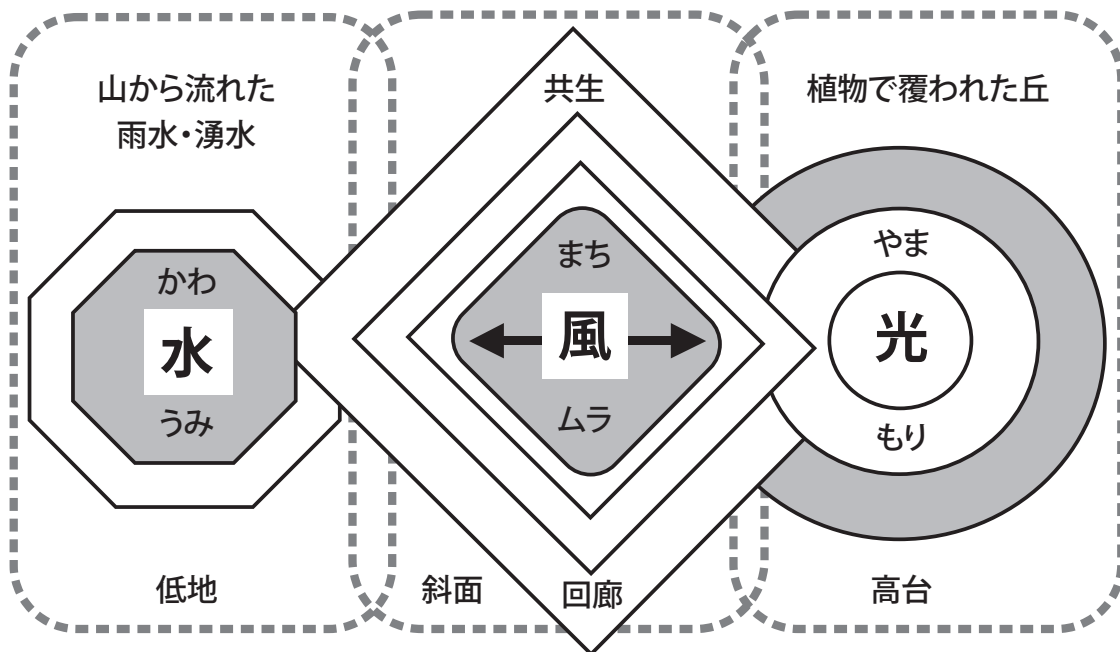
里山文化の見直し～土と緑への回帰～

現森林資源研究センターは、戦後、段々畑が耕作された「里山」地域である。周辺で消えてしまったかつての地形・自然環境が残るこの里山を再生させることは、やんばるで営まれてきたなりわいとくらしの価値をふり返り、今と未来の地域づくりに寄与するだけでなく、文化面・精神面の復興にもつながる。博物館で、里山をとおしたコミュニティの新しいモデルを考えるのである。

消えてしまった自然との共生のなかで生み出された技術や生活文化は、アジアを見渡せば、今も不断の姿として見る事ができる。アジアに開かれた沖縄で、海をへだてたつながりを意識しながら、地域に立脚する視点が、今後ますます要請されるのではないか。これまで省みられることが少なかった種や食を中心とした、アジアとのつながりを強化し、その中で沖縄と名護・やんばるを位置づける必要がある。

② 施設配置イメージ

琉球王国時代から受け継がれてきた風水思想にのっとり、中庭を中心に、南に山、北に海、その間に集落(まち・ムラ)の展示空間を配置。3つのテーマ空間を軸に、収蔵庫や管理棟、その他の諸室を連結し、景観と一帯の空間づくりを目指す。



開かれた屋上は、人々が集うコミュニティ・テラスとして機能する。

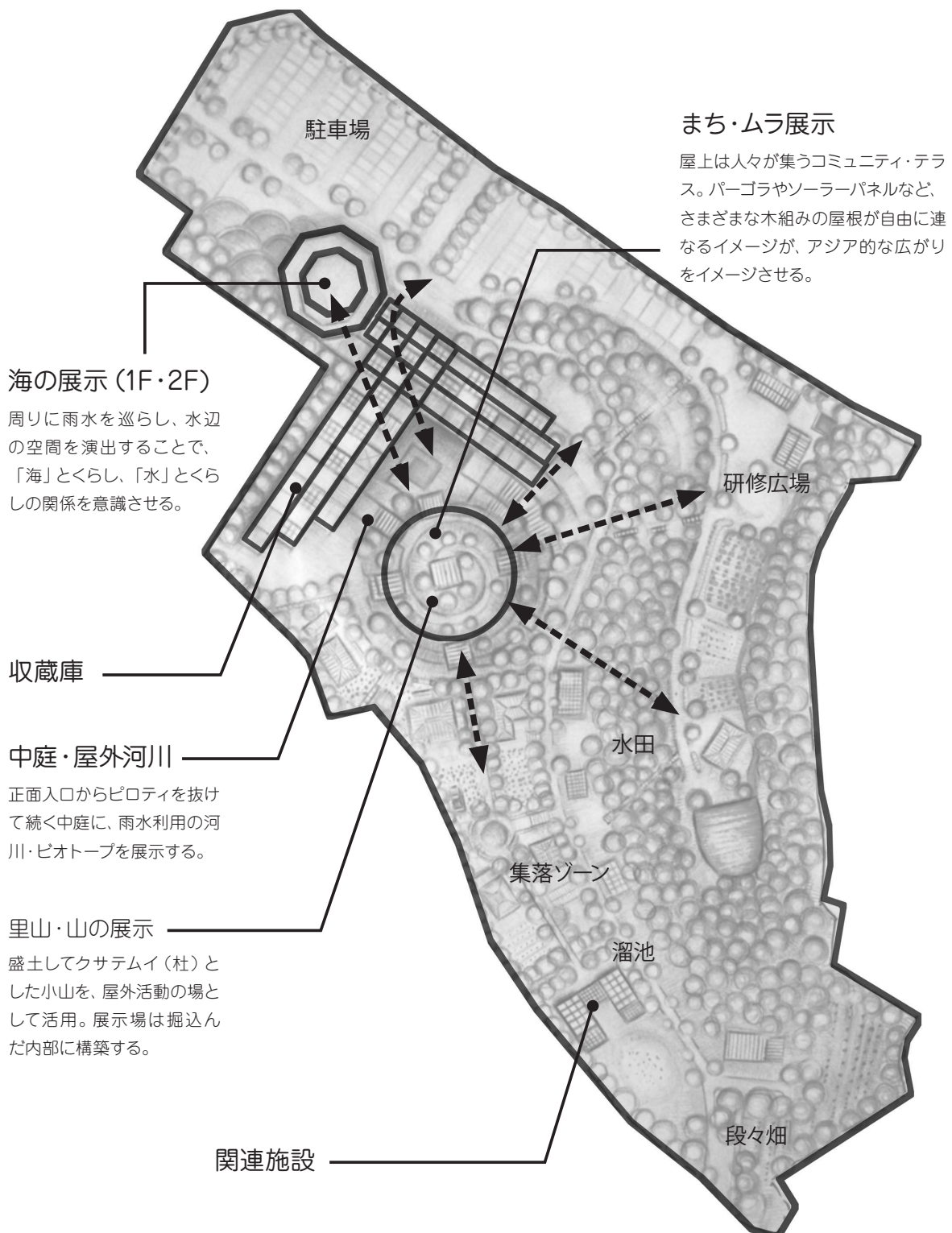
中庭を囲むように施設を四方に巡らし、斜面を利用して段状にスペースを重ねていく。屋根は、段畑のようにのびて周りの地形と融和する。

掘った土で上部を盛り上げ、丘状のドーム空間をつくる。その中は「山」の展示場となる。

6. 施設立地と展示計画資料

③ 施設配置イメージ

「海ーまち・ムラー山」という展示テーマを、かつて里山であった土地そのものの力を再生するなかで、実践的に展開する。



6. 施設立地と展示計画資料



